防長回天史

【普及版】

全十三巻

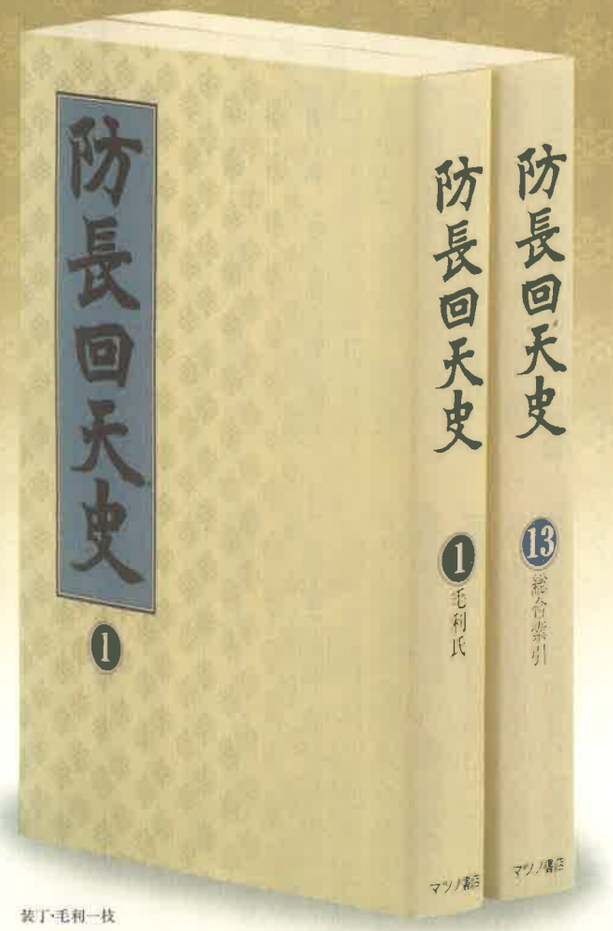
本巻十二冊
別巻 総合索引

最高最大の明治維新史
総合索引つき再復刻！

三百部限定（番号入）

末松謙澄 著

出版部創設35周年記念
マツノ書店



装丁・毛利一枝

マツノ書店
〒745-0032 山口県周南市銀座2-13 TEL0834-21-2195 FAX32-3195
http://www.matuno.com E-mail info@matuno.com

内容見本

ハレタルヲ見テ大ニ驚キ動揺ヲ初ム本道ノ官軍機ニ乗シテ一齊之レニ迫リ遂ニ母成關門ヲ拔キ母成附近ニ露營ス長兵ハ進ンテ大原村附近ニ至リテ宿營ス此日長人傷者四名ヲ出ス敵兵ハ四散シテ走リ數日ノ後僅カニ其一部ヲ收容シタリト云フ

會津戊辰戰爭ニ會津防禦ノ主力ハ勢至中山ノ二道ニ在リ母成ハ迂遠ノ間道ナルヲ以テ防禦薄弱ナリトテ其事ヲ詳記シ官軍ノ母成進擊ヲ主トシタルモ或ハ最良ノ策タリシヤモ知ルヘカラスト論評セリ往時伊達正宗ノ偉功モ之ニ外ナラス但シ此處ニ舊幕歩兵隊ノ在ルコトハ同書ニモ見ユ官軍側ノ文書ニ在ル佛蘭西式ノ訓練ヲ經タル此等ノ歩兵カ各處ニ砲壘ヲ築キ强硬ニ防戰シタルコト見ユ

按スルニ此戰ノ實況ハ當時長兵ノ士官タリシ梨羽有地二氏ノ實歴談頗ル興趣アリ因テ挿入ス

梨羽男爵ノ談ニ「總兵員ヲ三ツニ分テ野砲其他重モナル隊ヲ中央ヨリ進メ向ツテ右方ヨリ二三小隊ヲ進メ左方ノ間道ヲ薩州ノ四番五番隊カ進ンテ會津國境ノ母成ヲ攻落スルコトニナツタソコテ我輩ノ行ツタ方面ノコトタケヲ話シマスカ我輩ハ其右ノ方ノ僅ノ隊ノ一人テアツテソコハ猿岩谷ト云フ所テ極深イ嶮岨ノ谷テアツタ其谷ヲ越テ向フヘ渡ツタ所ニ母成臺場ノ補助臺場カアルソコニ「ホン」ノ獵師位カ通ル道カ附イテ居ル其方面ヘ我々ハ向ツタ所カ右ノ

内容見本

如キ嶮岨ナ所テアルカラ中々行クコトカ出來ナイ其内ニ一案ヲ考ヘ其嶮岨ナ谷ヲ長州兵二十人計リト土州兵同シク二十人計リトカ銃ヲ背負ヒ葛ヲ傳ヒ非常ニ困難ヲシテ其谷ヲ渡ツテ母成ノ横裏ノ假臺場ノ所ヘ出テ行ツタ其ヲ指揮シタ者ハ楢崎頼三テアル其レヨリ我々ハ其道ヲ進ンテ行ツタ遂ニ母成臺場ノ裏ニ出タ故ニ敵ハ狼狽シテ此會津國境ノ一番肝要ナ所カ落チタ」云々×

故有地男爵ノ談ニ「長州ノ我隊ハ母成峠ノ本道ヲ進ムコトニナツタ其レカラ我藩ノ第一大隊ノ二番中隊楢崎頼三カ率キテ居ル隊ハ薩摩ノ川村抔ノ率キテ居ル隊抔ト共ニ石莚口ノ方ヘ向ツテ進ムコトニナツタ此方ハ言ハヽ間道ノ樣ナ所テアルサウスルト母成峠ニマダ上ラヌ前ニ峠ノ下ニ大分廣イ原野カアル敵ハ其原野迄出テ居テ山砲モ持テ居ル或ハ其處ニハ佛蘭西式ニ編制ヲシタ步兵モ大分居ル始終喇叭ヲ吹イテ運動ヲヤツテ居ツタ先ツ我々カ出遇フタ戊辰ノ戰テハ一番廣イ所テアツテ見渡シモ能ク附ク一番戰ラシカツタ樣ニ思ハレル其處テ或所ニ些ト高イ所カアル其ヲ楯ニ取テ防禦シテ居タノヲ進ンテ行ク

×此日村亦村ノ川郎ヲ率キ其與藩ノ兵十人計リト土州兵同シク二十人計リトカ銃ヲ背負ヒ葛ヲ傳ヒ非常ニ困難ヲシテ其谷ヲ渡ツテ母成ノ横裏ノ假臺場ノ所ヘ出テ行ツタ其ヲ指揮シタ者ハ楢崎頼三テアル其レヨリ我々ハ其道ヲ進ンテ行ツタ遂ニ母成臺場ノ裏ニ出タ故ニ敵ハ狼狽シテ此會津國境ノ一番肝要ナ所カ落チタ」云々

「戊辰戰爭」の記述は約千六百頁あり、すべて「裏から見た戊辰戰史料」です。

内容見本

非ス因テ背面ニ出リ當テシ時ハナ我ノ武裝區ヲ甚シタ騎ヲ持ツ兵銃ヲ步兵ニ奉先シテ昨日本宮ヨリ中山街道ニ沿ヒ熱海ニ向ヒ關門ヲ擊破シ敵兵ヲ追ヒ横川ニ至リ轉シテ大原村ニ至リ母成口ノ兵ニ會ス二十二日官軍進ンテ猪苗代城ニ向フ城代高橋權太夫支フル能ハサルヲ知リ自ラ城ニ火シテ走リ官軍此地ニ宿ス此日薩將川村與十郎ハ一隊ノ兵ヲ率キ十六橋ニ向フ十六橋ハ日橋川ニ架スルモノニシテ後ハ戸ノ口原（大野原）ニ連リ右ハ猪苗代湖ニ臨ム若シ橋ヲ撤シテ之レヲ守レハ良好ナル防禦線ト爲スヘシ十六橋ハ堅牢ナル石橋十六節ヲ以テ作ル因テ此名アリ此日敵ハ敗兵ノ通過ヲ俟チテ將ニ橋脚ヲ破壞セントシタルモ牢クシテ破ルヘカラス僅ニ橋板ヲ撤セントセシニ川村ノ一隊ハ叱咤猛進シ長藩兵亦之ト戰力シテ直チニ之レヲ占領セリ※會津戊辰戰爭ニ依ルニ時ニ薩ノ川村與十郎母成ノ戰ニ東軍ノ背ヲ衝クベキヲ約シ道ヲ失シテ戰機ヲ逸シタルヲ恥チ其失敗ヲ償ハンガ爲メ晝夜兼行十六橋ニ向ヒ疾驅セシガ時宛カモ東軍橋ヲ斷チ今ヤ最後ノ一石ヲ除カハ橋全ク落チントセシ危機一髮ノ際ナリシヲ以テ急遽一齊ニ砲火ヲ開キテ東軍ヲ擊攘シ

内容見本

者モアル右ノ一點ヲ奪ヒ又左ノ一點ヲ奪ウト云フ樣ナ工合ニシテ進ンテ行ツテ母成峠ハ敵ノ唯一ノ防禦線トシテ賴ンテ居タ場所ヲ大シタ損害モナク追卷テ母成峠ヲ進テ仕舞ツタ」云々

中山口ニ於テハ我四番一小隊ハ諸藩兵ニ奉先シテ昨日本宮ヨリ中山街道ニ沿ヒ熱海ニ向ヒ關門ヲ擊破シ敵兵ヲ追ヒ横川ニ至リ轉シテ大原村ニ至リ母成口ノ兵ニ會ス二十二日官軍進ンテ猪苗代城ニ向フ城代高橋權太夫支フル能ハサルヲ知リ自ラ城ニ火シテ走リ官軍此地ニ宿ス此日薩將川村與十郎ハ一隊ノ兵ヲ率キ十六橋ニ向フ十六橋ハ日橋川ニ架スルモノニシテ後ハ戸ノ口原（大野原）ニ連リ右ハ猪苗代湖ニ臨ム若シ橋ヲ撤シテ之レヲ守レハ良好ナル防禦線ト爲スヘシ十六橋ハ堅牢ナル石橋十六節ヲ以テ作ル因テ此名アリ此日敵ハ敗兵ノ通過ヲ俟チテ將ニ橋脚ヲ破壞セントシタルモ牢クシテ破ルヘカラス僅ニ橋板ヲ撤セントセシニ川村ノ一隊ハ叱咤猛進シ長藩兵亦之ト戰力シテ直チニ之レヲ占領セリ※會津戊辰戰爭ニ依ルニ時ニ薩ノ川村與十郎母成ノ戰ニ東軍ノ背ヲ衝クベキヲ約シ道ヲ失シテ戰機ヲ逸シタルヲ恥チ其失敗ヲ償ハンガ爲メ晝夜兼行十六橋ニ向ヒ疾驅セシガ時宛カモ東軍橋ヲ斷チ今ヤ最後ノ一石ヲ除カハ橋全ク落チントセシ危機一髮ノ際ナリシヲ以テ急遽一齊ニ砲火ヲ開キテ東軍ヲ擊攘シ猛然疾風ノ如ク橋上ヲ突進セリ其他ノ西軍亦與十郎ヲ援ケントシ一部ヲ猪苗代ニ殘シテ續行ス東軍殊死シテ之ヲ防止セシカ事全ク意表ニ出テ所謂迅雷耳ヲ掩フノ遑ナク遂ニ此天險ヲ棄ツルニ至レリ是レ實ニ東軍戰敗ノ一原因ニシテ勝敗ノ數茲ニ決シタリト謂フモ一理ナキニ非ストアリ大體蓋シ然リシナヲン但シ十六橋破壞ニ假令一時官軍ヲ沮止スルモ全局ノ勝敗ニ關セサルハ見易キノ數ナリ實歷者長藩第四大隊二番小隊ノ山田仙三ノ談ニ直ニ先ヘ行ケ十六枚橋ヲ早ク渡ラナケレバ橋ヲ落ストイケナイト云フコトデ馳ケテ行ツタ敵ハ其十六枚橋ヲ一枚落シテ居ツタカラ梯子デ以テ其上ヲ拵ヘテ渡ツテ行ツタ向フカラ彈丸ヲ擊シテ突進シタル缺チ出シタ云々トアリ

會兵ノ東境ニ出戍セルモノ母成ノ敗報ヲ聞キ猪苗代ノ火光ヲ望ミ其退路ヲ絕タレンコトヲ恐レ倉皇退走シテ戸ノ口ニ聚ル戸ノ口原ハ十六橋ヲ經テ若松ニ至ル道路ニ跨リ方一里ノ原野ニ在リ既ニ十六橋ノ要點ヲ失ヒタル會兵ハ已ムナク戸ノ口原ニ官軍ヲ邀ヘ少クトモ若松市外ニ官軍ヲ防カントスルノ策ナリシモ川村ノ一隊ニ續キテ猛進スル官軍ニ敵スル能ハス夜ニ入リ遂ニ敗レ將士大半ハ戰死シ殘餘ハ纔ニ城ニ入ルコトヲ得タリ此日長薩兵進ンテ瀧澤ニ至ル而シテ本營ハ猪苗代ニ在リ二十三日官軍奮進若松城ヲ攻ム此日長兵ハ午前三時出發途上僅少ノ敵ヲ擊破シ進ンテ若松城下ニ迫リ第一廓門ニ至ル敵兵善ク拒ク而モ遂ニ之レヲ奪ヒ更ニ城門ニ薄ル敵死守シテ戰ヒ激戰多時午後一時ニ至ル時ニ兩軍死傷夥シク官軍亦既ニ二百餘ヲ算ス乃チ薩長土大村等ノ諸隊長集

※菅テ梨羽中將ニ聞ク河村氏ハ交番進擊ノ豫約ヲ守ラス

詳細かつ実証的なこと他書の追従を全く許さず。『慶応戊辰奥羽蝦夷戦乱史』の読者へもぜひ併読をお奨め致します。

其言聞取れず直に瞑目に至られたり屠腹に及ばれざりしは隱し居たる刄物如何にして取出されしか家内寢靜りたるを見て居間にて自裁の覺悟なりしも前より每夜細君氣を付られ此體を見て止られみよ女を以て私へ報知あり夫故翁は小用に行かれ同じく細君付添はれ果されず不得止畑へ運動する迚出られ後ろに始終細君付添はれし故立ながら咽喉を刎切られ如此に至れり嗚呼一室には七十餘の北堂君あり又一室には幼少の男女四子の寢貌を見細君と密議し孝道及び我が子の慈愛を去り忠の爲に從容死に就くの大丈夫山口藩中に其人ありと知られたる流石は周布政之助氏なり翁は若年村田四郎左衛門翁に愛せられ同翁周布氏を拔て政府へ入れ人に語られて曰く政之助こそ二州の政事を司るものなれと村田翁の眼力亦驚くべし當時今の周布公平氏は甫て十三令兄の庄三郎氏は十六なりき茲に又驚くべきは麻翁の死骸畑中より居間へ窃に取歸りしに北堂君簡一に面會したしとの事故居間に至れば公輔は立派に自裁を遂げしか何事も私しに心置かす宜布賴むとの一言には私も北堂君の心中を推計り面を得上げず涙に咽びたり翁を如此忠孝節義の心に富ましめしは全く寡婦の身にて幼年中翁に尤薫陶嚴密實に孟母の氣ありし御老母の由如何にも七十三の老に一滴の涙なく公輔は立派に死せしかとの一言は尋常の人の母たる者の出來ざる所と今に於て簡一は北堂の一言耳に殘り居れり自裁後机の上を見れば君上への上書及び庄金二子娚杉氏私への遺書相殘しあり簡一への遺書は曩に九月五六日始て自裁の擧ありしを止め死は易し生は難しと長々一書を認め翁の回答を乞ふとの手紙と一同封し上紙に死易生難と書てありました

井上既に刺さるゝの翌日伊藤俊輔横濱より歸て山口に到る亦或は不虞の事あらんとせり瀕死の井上に勸められ去て馬關に赴く藩政府之れに力士隊を與へ警衛に充て危嶮限りなきの中に於て專ら外國人應接の事に任ぜしむ

（伊藤の談話）

軍艦に乘て馬關に歸て來た處が昨夜か一昨夜周布は割腹するし昨夜井上は暗殺されたと云ふ譯だ其から直に早駕籠で飛で山口へ行て見ると俗論蜂の如く

内容見本
（70%縮小）

案ずるに十二月末高杉等は馬關より密使を山口市外の吉田藤兵衛に遣り軍資金を借りしことあり今吉富の談話筆記と履歴書とに據り其梗概を記すれば左の如し同年は藩命にて藩内一般節季の取引を廢せられ商業取引など全く廢絶の姿にて吉富は一酌して午睡せしに午後四時頃一使人來つて密會を求む其人は嘗て來島又兵衛に愛せられたる美禰軍太郎と云ふ者にて高杉が其心膽を見込みて此使命を授けしなり衣襟中に縫込みたる高杉と所郁太郎との密書一通宛を取出して吉富に渡し馬關方面の近狀を述べ且つ書中の使命を果さんことを請ふ吉富は其安着を祝し酒を煖め晩食を供し對話時を移す軍太郎曰く十二月二十七日夜高杉に招かれ一大事の密使あり生命を賭して之れに任ずるや否やを問はれ予不肖と雖ども從來命を捨て國事に奔走せる身なり未だ何事たるを知らざれども決して辭せざるべしと答へしに高杉大に喜び此密書を山口の吉富に持ち行くべし途中に三關門あり之れを避け路を山間に取り明早より途に上り如何にしても之れを屆くべし吉富の志操は予固く之れを信ず然れども萬一變節し居らば大事發覺の虞あり此刀を以て一擊の下に斫り斃し此書狀をば火中し其場に自殺すべしとて此刀をも與へられたり因て二十八日早朝馬關を發し今日纔に茲に致ることを得たるなりと盞し高杉等は正月上旬を期し大飛躍を試みんとして此事ありしなり當時井上は親類監視中にて座敷牢に入れられ親類が十人計も晝夜監視せり且つ井上自身亦一已の所見もあり故に其誘出は直ちに實行し得べきに非らず因て吉富は有合の貯藏金二分金二百兩を返書と共に美禰に交付し翌正月元日再び山路より馬關に還らしむ吉富は正月十五日早朝太田にて高杉に面會の際初めて美禰の馬關に安着せしことを知りたりと云ふ高杉所二人の密書は左の如し

（高杉の密書）

伊藤春輔今晩他行書狀相認候暇無之候間左樣御承知可被下候猶亦御存の通井上聞多は拙者眞の知己に御座候處此節幽囚に被處候由誠以遺憾之事に御座候何卒して脫走致候手段共は無御座哉

義遺憾此事に御座候然所國難日に切迫御兩國も遂に幕之有に相成候も必然之

内容見本
（70%縮小）

なつて夜半時分であつたらう是れから出やうと云ふことになつて陣揃をしろと云ふことでさうして三條さんなどが功山寺に泊つて居らるゝから御暇乞をしやうと云ふことで高杉とそれから河瀨も松原音藏山縣九右衛門も來て居たかと思ふが何でも四五十人で三條さんの所へ御暇乞に出た所が今の宮内大臣をして居る土方と水野丹後と云ふ御家老みたやうな者が居つたそれ等がもう夜半時過ぎだから眼を挙り々々起て來る三條さんは眠てゞざるので御起し申さうと云ふことで其の間に酒を一杯飲さうと云つて重箱の端に煮豆の食殘があるそれを出して飲で居る中に三條さんが起て來られたそこで吾々は此俗論を傍觀して居る譯に參らぬから兵を擧げて馬關へ出で馬關を取て根據地として俗論と戰ふと云ふのでそれで御暇乞を申すと云ふて御暇乞をして庭へ下た所が兵隊が整列して居るそれで吾輩は功山寺に御暇乞に出やうと云ふ前に自分の陣屋へ行て兵糧の準備をしろと言付けて置たから這入らうとすると門が閉めてあつて這入らせぬ誰であつたか一人内から出て來て大變です御堀さんが銃器も何も皆な取上げて門外へ一人でも出る奴は斬ると云ふことですから御歸りになつては大變でゞざいますと云ふ爾うかと云ふて已れだけは行くと云ふので右の通り高杉と共に三條さんの所へ上つて出た所が遊撃軍だけは揃つて居る大砲が一挺あつた森重健藏が大砲方で後とから來る吾々は馬に乘て高杉が總大將ださうした所が雪が非常に積て居る其所へ福田良助がやつて來て雪の中へ坐つて高杉に向い今日だけは是非御止りを願ひたいどうもさう云ふ譯に行かぬと問答をして居ると森重健藏が後方から總督御進みになつたら宜からうと大いな聲を出した其はずみにずつと先きへ出て仕舞つたさうしたら何でも三十人か四十人居つたらうが吾輩の力士隊の奴等も墻を蹈越て忍んで出て吾輩等に追付たのが十五六人も居つたらうそれから馬關へ行て夜の未明に馬關に奉行がある寺内の老爺なども居つて唯目的は食ふ物が取るれば宜いのであるから追退けさへすれば宜い人を殺すのは惡いと云ふので空鐵砲を打つと皆後ろの墻根を越して遁げて仕舞ふたそれで奉行所を取て後ろの寺を本

内容見本
（70%縮小）

（後藤野利秋）野津七左衛門（鎮雄）伏見ハ我長兵其主力タリ　山田市之允林半七片野十郎等之兄弟桂原小彌太三島彌平等之ヲ率ユ　第六中隊第二奇兵隊既ニ伏見ニ在リ二日又第一中隊奇兵隊第八小隊（齊藤隊）ヲシテ竹田伏見邊ヲ巡邏セシム一三百餘壯士悉ク集ヘシ

案スルニ三日ノ開戰前ニ薩兵ハ關門ヲ四ツ塚ニ設ケ兵ヲ上鳥羽ニ出シテ之ヲ守リ長兵及ヒ薩兵ノ一部ハ伏見市街ノ北部ニ入リテ之ニ據リ伏見ノ薩兵ハ御香宮長兵ハ其西ニ陣シ土兵又其西ニ居ル當時長薩兵衆寡ヲ以テスレハ固ヨリ幕軍ノ敵ニ非ラス故ニ初メヨリ必勝ヲ期スルヲ得ス因テ開戰ノ狀況ニヨリテハ鳳輦ヲ護シ道ヲ丹波路ニ取リ山陰山陽ニ退キ後圖ヲ畫セントセシハ長薩ノ豫メ合意セシ所ナリ左ニ錄スル所ノ西郷吉之助ノ條書ト片野十郎ノ條書トハ二藩協定ノ概ヲ見ルニ足ルヘシ

又案スルニ當時朝幕ノ兵數明確ナラス但シ長薩兵ノ遙ニ寡少ナリシコトハ疑ナシ勝安房カ江戸城中ニ於テ慶喜ニ進言セシ所ヲ手記セルモノニ曰ク「伏見之一擧薩士三百五十名ニ過キス長人三百餘名其他ハ勝敗ヲ見テ進退ヲ決スルノ徒ナリ我兵一萬五六千名一敗塗地死ヲ以テ國ニ報スル時ナシ關東之士官何ソ其略ナキ哉今彼大勝ニ乘ジテ猛勢不可當」云々トアリ下文樗取ノ書中ニモ薩長兵千人ニ充タストアリ稍其概ヲ見ルニ足ル但シ長薩ノ兵數ハ二人ノ記スル所ヨリモ多カリシコトハ明ナリ寺内暢三ノ屆書ヲ左ニ掲ク長兵ノ全數ハ蓋シ之ト大差ナカルヘク又伏見鳥羽從軍ノ長兵ヲ七百トセルモノ其實ヲ得タル如シ

（西郷ノ條書）

一、御決策相立候ハヽ一發前夜玉印御微行之方可宜哉之事×
一、砲聲相發シ候節ニ臨ミ堂々ト鳳輦ヲ被移候方可宜哉之事
一、山陰道ニ御掛リ被爲在候テ可宜哉之事
一、朝廷ニオイテハ總裁御止相成候方可宜哉之事
一、浪華ノ戰ト相成候ヘハ京地ニテハ依然トシテ御動座無之方可宜哉之事
一、中卿ハ是非御供不相成候テハ不相濟由其外幾人ニテ可宜哉御供之人數與丁人夫等之手當モ調置候樣トノ事

×萬一ノ際ハ山陰道ノ巡狩モ廟議ニ決シ一セ極密ニ急ク幸ヲ奪ハレ車駕アリ但シ綏撫ノ爲ニ山陽ヲ巡幸スル且リ前鳳輦不時ニ發ス誤テ生主輔世頭卿ニ言ヘシ正月三日ニ爲タト主殿寮ニ陽メリ

備シ少ク勤人ヲ揺ルセ心ヲ

實ナリ記ニ倉ニ詳ス

内容見本

あ

あい

秋穂（周防吉敷郡）④378 418 ⑤62 154 348 ⑧21 ⑨8 631 637 ⑫320

相川真三郎（長門清末藩士上利駈太の育）⑪57

相木岡四郎（長州藩遊撃隊士）⑩12

相木又兵衛（長州藩清水美作の家臣、第二奇兵隊中隊司令）⑧366 ⑨375 ⑩13

藍座（長州藩）

相去駅（陸中）①97 111

会沢正志斎（安、常陸水戸藩儒者）①206 ②91

相島（長門阿武郡）①328 ④446

会津川（岩代）

会津藩（岩代若松藩、松平保科肥後守容保）① 111～115 272 303 ④308 387 388 ⑤255 257 358 363 364 365 376 379 424～429 28 47 251 ⑦117 139 218 316 317 ⑧517 567 ⑨228 348 352 428 432 433 523～526 32 42 48 49 135 138 145 153 159 161 181 183 190 192 211 214 217 219 225 240～255 259 260 262～267 270 272 275 281～284 286 287 288 291 294 296～299 302 305 306 311 314～318 322 323 324 329 331 334 336 338 339 340 344 348 351 365 374 376 377 380 384 385 386 434 444 461 474 478 480 481 493 496 497 500 510 511 515 521 522 526 530～537 542 554 付 *47 49 51*～*54 57 58 68 73*～*82 85 94 102 104 105 113 116* ⑪7 8 16 39 47 59 67 69 70 71 75 81 86～90 94 97 99～102 105 106 111 154 225 262 269 314 328 330 351 364 397 395 396 397 402 403 404 407 408 418～421 424 434 439 443 444 445 448 449 450 452 455 456 457 474 476 477 480～483 486 492 498 511 521 522 526 528 529 535 540 541 542 545 549 550 562 587 589～594 602 610 611 612 663 ⑫38 39 146 175

あい

会津藩士の激昂（慶応元・九）⑦218

会津討入の命令（明治元・一・二十二）⑩135

会津口の小戦（明治元・四・十八）⑩243

小社版『防長回天史』の特色は、詳しい索引がついていることです。山口県文書館専門研究員の田村哲夫氏は古文書解読、編修の第一人者として『萩藩閥閲録』『防長風土注進案』、そして定年退職後は小社の『奇兵隊日記』『高杉晋作史料』ほか多くの根本史料の出版に尽くして来られました。（十一頁に写真あり）

また田村氏は一方「索引作りの鬼才」としてもよく知られており、この「綜合索引」は、独力で一年がかりの大仕事でした。

そのおかげで本書の利用価値は飛躍的に高まり、利用者から大変喜ばれており、今回の再復刻に結びついたのです。

東北人謬見考

謙澄記

戊辰奥羽戰爭ニ付テハ東北文書中事實ニ齟齬セルモノ曲筆ニ陷レルモノ少カラス此等ノ事多クハ既ニ章文中ニモ註解トシテ挿入セルモ長文ヲ要シ又ハ錯綜ニ渉リ章文間ニ挿入スルニ便ナラサルモノ頗ル多シ今此等ヲ綜合シテ一括ト爲シ此附錄ヲ作リ試ニ題シテ京北人謬見考ト稱ス顧フニ東北人ニ在リテハ戊辰ノ亨ニ於テ要スルニ敗者ニ外ナラス其立脚地ノ回護ニ力ムルハ人情ノ自ラ然ラシムル所アルヘク隨テ此等ノ事モアルヘク予ハ之ヲ諒察セサルニ非ス然レトモ予既ニ一個ノ歴史著者タリ乃チ事ノ眞相ヲ闡明スルハ已ムヲ得サルノ義務アリテ存ス是レ此附錄アル所以ナリ讀者幸ニ之ヲ恕セヨ

防長回天史第六編上第二附錄

◎東北人謬見考論評答辯

謙澄稿

尊敬スヘキ一庄内論者アリ予ノ東北人謬見考ニ對シ滔々數萬言ノ論評ヲ加ヘ之ヲ世ニ公ニシ人ヲ介シテ一本ヲ予ニモ示サレタリ論者ハ予カ維新以來五十餘年ヲ經タル今日ニ於テ此謬見考ヲ作ルハ雅量ヲ缺クト咎メ人身攻擊モ少カラサレトモ實ハ東北人間ニ於テ五十年後ノ今日ニ於テ仍時勢變遷ニ順應セサル議論ヲ弄シ陸續トシテ關西諸藩殊ニ薩長二藩ヲ非議スル文書ヲ公刊スルモノモ少カラス此挑戰アルカ故ニ予ハ防長回天史ノ著者トシテ相當ノ防衛的辯駁ヲ加フルハ已ムヲ得サルノ事ニシテ亦史家トシテノ一義務ナルヲ信ス然レトモ之ニ對シ論者ノ評論ノ如キヲ得ルハ予固ヨリ之ヲ歡迎ス蓋シ史上ノ事實ハ研究ヲ重ネ其眞相ノ發揮ヲ得ベケレバナリ隨テ予ノ言辭ニシテ直截露骨ニ過キタルモノハ予之ヲ變更緩和スルニ躊躇セス唯夫レ

内容見本
（70%縮小）

書誌・船舶・外語・諸隊名は利用の便を図り、別項に分類してあります。

あ

会津史

会津戊辰戰争 ⑲217 246 248 268 272 294 306 付 *48 50*

会津文書

明石藩記

赤塚源六（春日艦長）書翰

秋田治革史大成 ⑪621 624 625

秋田藩戊辰勤皇始末 ⑩252

秋田文書・記録 ⑪137 141 149 169 170 186 280 289 646 675

麻田事蹟談

荒賀直哉氏史談速記 ⑤56

安藤太郎戰争記 ⑲付 *112 125* ⑫85 86 89

い

飯田藩記 ⑪545

維新戰役実歴談（維新戰歿者五十年祭事務所刊）⑫78 ⑪67 629

維新風雲録 ④182

板垣退助伝 ⑤350 406

一ノ関記録 ⑪163 171 213 229 243

伊藤公伝 ⑪583 584 ⑦127

井上侯伝 ⑫497

井上伯伝 ⑤406

岩国藩記 ④182

岩国記録 ⑪512 527 571

う

上田藩記 ⑪551

雨窓紀聞

梅地庸之丞実歴談 ⑫85

浦日記 ④92 ⑤39 59 78 176 255 328 350 427 428 ⑥23 24 37 68 171 308 309 353 360 ⑪626

岩倉公実記 ⑤28 31 76 ⑪500 505 515 529 537 556 557 560 574

岩倉公年譜 ⑪512 527 571 ⑫279

岩崎藩記 ④182

岩村高俊（精一郎）事蹟 ⑤406 ⑫497 ⑪583 584 ⑦127 ⑩48 ⑪147 ⑫11 246 332 339 340 412 415 416 425 483 484 ⑪379 588 618 ⑪172 ⑨465

あ

秋田軍艦・秋田船 ⑲425 ⑪184 255 294 620 676 680 682 683

朝日丸

阿州船 ⑫179 ②480

東艦（米艦ストーンウオール号もと甲鉄艦）⑪669 ⑲81

亜米利加軍艦・亜墨利加船（アメリカ）②14 28 30 539 ⑪676

う

震揚丸（長州艦）⑫329 346 347 354 368 384 386

え

英国船 ⑪415 458 460 471 475

永平丸（薩藩船、もと英艦フイリーコロス）④451

越後商船 ⑩462

延年丸（佐賀藩肥前船）⑫127 131 134 141 179

お

大江丸（幕艦）⑪632 640 641

大阪船（オーサカ号）⑫109 110

大阪丸（土州船前船）⑩463 465

乙丑丸（長艦、もと英艦ユニオン号）⑦474 475 485 493 494

か

回天丸（幕艦）⑧624 626 442 ⑪631 633 640 642 645 646 647 652 653 662 664 671 ⑫68 80 81 84～88 91 94 101 115 119 120 121 122 127 128 132 141 142 143

回春丸（幕府千秋丸）⑪632

海門丸（蒸船）⑦268 304

回陽丸（幕艦）⑩39 114 180 ⑫80 81 96

開陽丸（幕艦）⑩28 39 40 ⑪631 633 635 636 640 642 645 652 669 ⑫102

和蘭船・阿蘭陀船（オランダ船）⑪147 148 150 151 152 155 165 177 179 180 395 404 490 494 497 ⑨222 225 226 306 368 447 452 470 507

温泉丸（島原船）⑪534 589 ⑩147 173 558 574 ⑫283 315 316 320 349 ⑫179 ①212 314

『防長回天史』の再刊を喜ぶ

奈良本　辰也

明治維新は、わが国の歴史に於て、最も意味の深い大変事であった。それは、三百年もつづいた封建社会を新しい資本主義の社会に変えると同時に、植民地化が進んでいた当時のアジアの国々のなかで、只一つの独立国として残すという壮挙をも成し遂げたのである。

だから、維新史を考えるということは、わが国の現在を語るについても、多くの教訓を得ることになる。しかし、その維新史をどこから切ってゆくかと問われるならば、わたくしは『防長回天史』十二巻を読むことをすすめる。

回天史は、長州藩を中心にして書かれた幕末より明治の初年に至る時代の風雲を、しっかりとした史眼でとらえた素晴しい本だ。毛利家には、厖大な維新史の史料があり、それを解読しながら、その家史を編纂するということは、かなり以前から行われていたようだ。

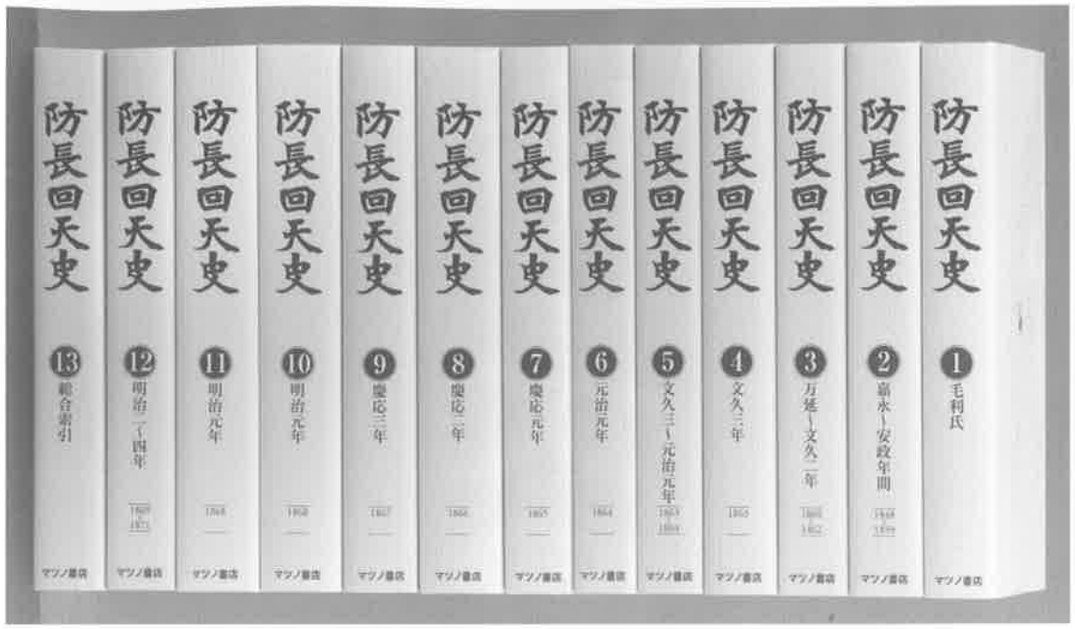
そのなかの一人に中原邦平氏のようなすぐれた歴史家もいた。しかし、この本は、中原氏のように長州藩の藩士によらないで、末松謙澄氏のような他国の士を中心にして出来あがっている。

しかも、その下にあつめられたのは山路愛山・笹川臨風・堺枯川・黒田甲子郎・斉藤清太郎等、今聞いても、すぐにうなずける程の錚々たる人物達だった。史眼も文章も、第一級の文筆家であったと見てよい。末松が此本の編纂に携ったのは明治三十年だったが、その全部十二巻を完成して、世に問うことができたのは、大正九年六月のことだった。

着手以来二十三年の歳月を過し、夜を日についでの大事業だった。末松は、自らが長州藩と戦って小倉の出身である身を此大事業に投じたのは、「史家の心血をそそぐに足る」と確信したからだと言っている。彼及びその助手の者達が全て他藩人であることを、史家の客観性を保証することにでもなると言っている。そしてあくまでも史料に基づいての叙述に全力をそそいだとも言っている。

私は、今日まで、その全冊を幾度となく利用してきた。ためにに背表紙も禿げ落ち、綴じ系もばらばらになっている。「韋編三たび絶つ」である。復刊を待つことしきりである。

（前回復刻時のパンフレットより）



『防長回天史』巻別明細

① 毛利氏		第壱編
② 嘉永～安政年間	1848 ～ 1859	第貳編
③ 万延～文久二年	1860 ～ 1862	第参編上
④ 文久三年	1863	第参編下
⑤ 文久三～元治元年	1863 ～ 1864	第四編上
⑥ 元治元年	1864	第四編下
⑦ 慶応元年	1865	第五編上
⑧ 慶応二年	1866	第五編中
⑨ 慶応三年	1867	第五編下
⑩ 明治元年	1868	第六編上
⑪ 明治元年	1868	第六編中
⑫ 明治二～四年	1869 ～ 1871	第六編下
⑬ 総合索引		

『防長回天史』を読むということ

作家　秋山　香乃

数字というものは面白い。

例えば、「江戸時代から今日まで、日本の人口増加は甚だしい」と書いたところで、漠然と「そうなのか」という感想を持つに過ぎないが、これをひとたび数字を添えて次のように書き換えるだけで、新鮮な驚きを読む人に与えることができる。「江戸時代から今日まで、ざっと一億人も人口が増えた」という具合に。

だから数字が記してあればあるほど資料としては有難く、具体的にその物事をイメージしやすくなると言えるだろう。

『防長回天史』は、この数字が多用されており、他書では決して読みとることのできない事情が、浮き上がってくるのが嬉しい特徴の一つだ。

長州の生んだ英雄高杉晋作を、数字で表すとどうなるか。例えば他書を参照に書き出せば、「晋作は、二百石取り大組の格式の高杉家の跡取りである」となる。これを本書を参考に書き足すと、「高杉家は、およそ上に七十人、下に五千人、同格五百七十人ばかりの位置づけ」となるのである。前者からだけでは見えてこない、高杉晋作の矜持がぐっと胸に迫る数字である。この男の言動をより深く理解するうえで、これは大きな助けとなるだろう。そして、『防長回天史』を紐解かねば、知ることの難しい数字でもあるのだ。

数字の件はもちろん一例に過ぎない。本書は、頁を開かねば知ることのできない事柄が、他にも数多く記されている。「幕末の長州を語るのに『防長回天史』なくしては語れない」といわれる所以である。

筆者末松謙澄はその書き出しで言う。

「細事にして大局に要なきものも多く之を記載せるは此時期間に於ける防長二州の事実の全斑を網羅せんとしたるがためなり」と。

ここにある「網羅」という言葉こそ、まさしく本書をよく言い現わしていると言えるだろう。政治、事件、戦、外交はもちろんのこと、兵制、農業、教育、人事、改革、民生など――長州の歴史を記したもので、これほど多項目にわたって具体的且つ詳細に記されたものは他にない。

例えば、人事は移動があるごとに、要路一覧として記録され、誰がどの時期どの役職に就いていたのか一目瞭然となっている。のみならず、実力主義の採用後、どの人物がなにを切っ掛けに登用され、どのように要路に就いて登っていくのか、あるいは逆にいかにして失脚し、その末路はどうであったかに至るまで、手に取るようにわかるのは、現在に照らし合わせても学ぶところが多く、本書の醍醐味の一つではあるまいか。

ことに、一度は長州だけでなく日本をも動かす寸前までいった大物政治家長井雅楽の失脚していく様や、対馬問題に携わり、見事に解決して藩外に大きな後ろ盾を得た桂小五郎が、着々と地歩を固めて長井亡き後の長州を担っていく姿は、陰惨な政界の現実をも照らし出し、敗者勝者の明暗の残酷さに息を呑む。

教育では、藩校明倫館や西洋学所などの学校で、何を学んでいたのか科目までも細かく確認でき、兵制では刻々と西洋化されていく操練や演習の様子だけでなく、実戦に耐えうる軍備が整えられていく様を見ることができる。そして、どの兵器がどの時期に採用され、あるいはどこから幾らで買われたかということさえ、わかる範囲で記載されているのだから、実に感嘆を禁じえない。本書によって、長州は安政年間にすでにゲベール銃を使って軍事演習を行っていたことが知れるのだ。

西洋式軍艦への関心も、早い時期から同藩は高く、やはり安政年間にはプロジェクトチームが組まれ、製造と購入の両面からこつこつとした努力と準備が進められていく。それにもかかわらず、蒸気船の購入時期が遅れたのは、外貨の確保と石炭の安定補給の問題で躓いていたからなど、意外なことが足かせとなったことも、本書は教えてくれる。石炭補給の問題は、三代目奇兵隊隊長赤根武人の養父が、士籍を脱して石炭商人となり、急場を凌いだなど、実に興味深い話である。本書ではこういう藩士らの細事のエピソードも満載で、随所で楽しむことができるのだ。

心にくいと思うのは、ここまで防長の歴史に詳らかでありながら、本書が防長二州のみにとどまらず、日本全般を見渡し、折々の時局の大勢をも記して長州と対比させてあることだ。一つの事象を、出来得る限り多くの立場から照らし出してあるため、読み手は多角的な視点と物の見方を知らず知らずのうちにさせられている。有難い配慮である。

ところで長州は、文久三年五月十日米船ペムブローグ号に攘夷と称して砲を放ったのを皮切りに、国内外を敵に回して孤立する。その後、禁門の変、内訌戦、幕長戦、戊辰の役と、およそ七年の長きにわたり苦しい戦いを展開していくわけだが、その激切な戦闘の経緯を活写する末松の筆が、それまでとはあきらかに違う文調で生々しく滑り出し、ハッと目が覚めたような鮮やかな印象を読むものに抱かせる。『防長回天史』は、膨大なページを割いて克明に描かれた戦の場面が秀逸なのだ。

本書が「事実を排列するを要旨とせり」と筆者が述べる通り、「行文中多くの原文書を挿入」することで「記録的歴史の性質」を高め、戦場ごとに日付を追う記述形式を取ることで客観的冷静な視点を失わぬ一方で、余分な修辞を排除した端的でリズミカルな文体が、かえって戦場の容赦のない緊迫した臨場感をよく伝えている。また、戦地図を随所に使い、それぞれの地形や位置関係を視覚的に明らかにさせてある心配りは、まさに痒いところに手が届く感だ。

さらに瞠目するのは、桂小五郎らを中心とした長州藩上層部の外交だ。幕長戦においては、実戦前の薩摩藩や幕府との駆け引き、周囲の藩との折衝の様が、当時の問答が要約されずにそのまま開示されてあるため、互いの手のうちを今に知ることができる貴重な史料となっている。戦は始まる前の外交手腕が勝敗に大きく影響を及ぼすことが、用意周到な長州の動きで納得させられるのだ。

本書は膨大な量もさることながら、いささか難解な原文書も含み、誰にでもやさしく読み解ける本とは言い難い。ただ、右記の如く、ここでしか見ることのできぬ史料を多く含む以上、一度は通読したい書のひとつではあるまいか。なにより、長州の歴史を知ることは、我が国の歴史を理解するうえで、ひいては今という世を見渡すうえで、不可欠に違いないのだから。

『防長回天史』の再刻を祝って

歴史作家　桐野　作人

◇読者にやさしい本

十数年前、『修訂 防長回天史』上・下（柏書房、一九六七年復刻版）を古書で買った。それまで高価だったため、図書館で閲覧・複写して間に合わせていたが、仕事の必要に迫られて、やむなく購入したのである。仕事にはそれなりに役立ったが、往生したのは同版が縮刷版のため、活字が極端に小さかったことである。夜になると、目がチカチカして読むのにとても苦労した記憶がある。

じつをいうと、その頃にはすでにマツノ書店の復刻版（一九九一年刊）が刊行されていたのだが、情報不足で知らずにいた。のちにマツノ版を入手してから、何と読みやすいのだと驚いた。

マツノ版は著者末松謙澄の修訂再版（一九二一年刊）全十二冊を忠実に復刻したのみならず、新たに膨大な総合索引（田村哲夫氏編）が付いて全十三冊である。本書のような大著では、索引の有無が使い勝手に大いに影響する。索引がなければ、幕末長州藩の歴史の大筋をある程度理解していないととても使いこなせない。だから、従来の修訂再版は一般読者にとっては、とても敷居の高い本だった。それが総合索引のおかげで、ずっと読者にやさしくなった。マツノ書店の読者に対する気遣いを感じた次第である。故・田村哲夫氏の労作には敬意を表さずにはおられない。

今回、このマツノ版が軽装版として再刊されるという。前回の復刻から十八年という歳月は読者層の世代交代を促しているはずで、潜在的な需要があるのではないかと推察される。また読者にとって、廉価版になったことも、さらにやさしい本になったといえよう。

◇「記録的歴史」の有難さ

では、本書はどのような特色のある史書だろうか。著者末松謙澄は巻頭の「総緒言」のなかで、「本書ハ評論的歴史ヨリモ寧ロ記録的歴史ノ性質ヲ以テ著述セリ」と述べているように、「批評論断」をつとめて避け、「事実ヲ排列スル」ことを心がけたと述べている。後世の我々にとっては、世上の価値観や歴史観の変化に左右されないという意味で、非常に有難い叙述態度である。もともと本書の編纂は毛利家からの委嘱であり、その編纂責任者となった末松自身が長州閥の領袖・伊藤博文の女婿だから、本来、長州藩という維新の勝者の歴史を叙述するのが主たる目的だったことは論をまたない。

しかし、同時に末松は第二次幕長戦争で長州と交戦した豊前小倉藩の出身である。本書が長州の歴史を綴りながら、かなりの客観性を保持しているのは、末松の出自によるところも大きいのではないか。

本書がどの程度客観性を保持しているだろうか。その証左といえるのは引用史料の質量と多彩さである。総合索引には「書誌名索引」も付いている。それによれば、引用史料はじつに膨大で三九四点に上る。そのうち、八割以上が長州藩以外の史料である。本書が「記録的歴史」である以上、対立的もしくは中立的な藩外史料が圧倒的である事実がその客観性をおのずと担保しているといっても過言ではない。

本書は基本的に編年体による史書だが、たとえば『大日本史料』に代表されるような綱文（事件や事柄についての長文タイトル）が付いた体裁ではない。章の初めに節見出しがまとめて付いているものの、頁も明示されていないので、節の区切りがわかりにくいのは事実である。しかし、それも綱文を立てることによって歴史をぶつ切りにできない、事象の連続としての歴史叙述にしたいという末松の思いが込められているのではないだろうか。

◇歴史の敗者へのまなざし

内容面でいえば、個人的には歴史の敗者の描き方に関心がある。たとえば、長井雅楽、赤根武人、明治二年（一八六九）末から翌三年初めにかけての脱隊事件である。

長井雅楽に関しては、「航海遠略策」に基づくその周旋活動は決して「私意僭越」ではないことを述べ、失脚したのも尊王攘夷運動の勢いに抗するあたわざるためであり、その「冤」を主張する者が藩内に少なくなかったことも付け加えており、同情的ですらある。

一方、赤根武人については叙述がやや錯綜している。赤根がいわゆる「俗論党」に内通していたという伊藤博文の談話を載せ、さらにその脱走を「叛逆悖乱之重科」とする罪案を掲げているが、「赤根武人の蹉躓」と題した節見出しが掲げてあるも、それに相当する本文は見当たらない（六巻）。単なる脱漏なのか、意図的な削除なのか不明である。いずれにしろ、この一件の評価の難しさを感じる。

脱隊事件については、「賊軍」と規定して断罪しているが、たまたま西郷隆盛が視察のために馬関を訪れた一件を記しているのが興味深い。木戸孝允は西郷が調停策に出るのを恐れていたことを明らかにして、この一件の裏事情もわかる。

最後にあえて瑕疵を挙げるとすれば、禁門の変の叙述が極端に少ないことである。幕末維新史に占めるこの事件の重大性にくらべて、「甲子七月十九日の変」はわずか二十数頁しかない。なぜ分量が少ないのか、その事情は容易に察せられるが、いかにも不十分で物足りない。

とはいえ、その瑕疵を割り引いても、本書の価値を下げることにはならない。末松が抱いた「維新全史ト異ナラズ」（再版緒言）という意図は十分達せられていると思うからである。これほど重厚な史書が廉価版として再刻されることを心から喜びたい。

慶喜に突き付けられた『防長回天史』

萩市特別学芸員　一坂　太郎

長州藩を中心とする幕末維新史の白眉ともいうべき『修訂防長回天史』全十二冊（大正十年、以下『防長回天史』とする）は戦後、四度も復刻されている（ただし三度は縮刷合冊）。さらにこのたびマツノ書店が原寸十二冊で、並製の廉価、普及版として五度目の復刻をするという。

そこで私は、マツノ書店の松村久さんから推薦文執筆という大役を仰せつかったのだが、いただいた依頼状には「（販売先として）今回は県外のお客様、とくに東軍関係までを射程に入れています」と、あった。

（いまさらなぜ？『防長回天史』）と思われる御仁がいるかも知れない。だが、山口県内に居座っていると、さほど珍しく感じられない『防長回天史』も、「防長」から一歩外に出ればなかなか見ることさえ難しい希書なのだ。だから松村さんは今回、県外在住の幕府側の研究者やファンにも、この名著を普及させたいとお考えのようである。

では、幕府側からこの時代を眺めようとする読者に『防長回天史』を、具体的にどのように薦めればよいのだろうか。あれこれと考えていたところ、ずっと以前に見つけた面白いことを思い出した。

『防長回天史』が勝者の幕末維新史の代表作なら、敗者である幕府側の代表作は『徳川慶喜公伝』だ。全八冊、大正七年（一九一八）の出版だから『防長回天史』とほぼ同時期に世に出たことになる。

『防長回天史』は伊藤博文はじめ多くの関係者の談話を集めているが、『徳川慶喜公伝』の編纂スタッフもまた、明治四十年（一九〇七）七月から昔夢会なる座談会を開き、計二十五回にわたり慶喜本人から取材を行った。そのさいの筆記録は、伝記とは別に大正四年に二十五部限定で出版されたが、現在は『昔夢会筆記・徳川慶喜公回想談』として東洋文庫（平凡社）に収められているので、容易に読むことが出来る。

この、昔夢会におけるスタッフの質問の中に、『防長回天史』が登場するのだ。もっともここで掲げられた『防長回天史』は時期的に見て、最終的な（今回復刻される）修訂版ではなく、大正元年に出た最初の版である。

『昔夢会筆記』には「毛利慶親父子と御書通ありしという事」の見出しのもと、次のようなことが記されている。

元治元年（一八六四）三月二十二日、長州藩の使者が入京して、藩主父子の手紙を慶喜のもとに届けた。それには同年二月二十六日付で、「攘夷の国是を変ずることなく、三条元中納言以下正議の堂上（七卿ら）を復職せしめ、烈公（慶喜の父徳川斉昭）の遺志を継ぎて、国家のために力を尽されたき旨」が、述べられていた。前年八月十八日の政変により、過激な攘夷を断行した長州藩や三条実美ら七卿は失脚し、京都を追われていたのだ。長州藩は慶喜を

自分たちの理解者と考えて頼ったのだろう。

これに対し、禁裏守衛総督に任ぜられたばかりの慶喜はご丁寧にも、四月九日付で長州藩主父子に返事を書いたという。そこでは、「攘夷の儀につき深く尽力せられるること感激に堪えず。しかるに今日の形勢に至る。足下の心中察するに余りあり」と、長州藩の攘夷実行を称え、苦境については同情を示す。

さらに慶喜は「さりながら、貴藩の進退いささか恭順の道を失わずして、勤王誠忠の実蹟いよいよ顕然たるにおいては、攘夷成功の道も自ら開くるに至らん。国家のため厚く勘弁し、台命に応じて速やかに使節を差し上せ、公命を仰がるべし」と、長州藩の復権を励まし、その方策を指示する。驚くべき内容の手紙なのだ。

結局、この問題は同年七月十九日の「禁門の変」へとつながり、敗れた長州藩に朝敵の烙印が押されて、一応の決着がつけられた。それから半世紀の後、

『防長回天史』にその御返書なるものの全文を掲げおり候。真偽いかがに候や」

と、編纂スタッフに問われた慶喜は、

「長州よりの使者の来りしこともなければ、さる返書を遣わしたることもなし。当時の形勢より考うるも、もとよりあるべきことにあらず」と返答した。そのため、この話題は残念ながら打ち切られてしまっている。

晩年の徳川慶喜

慶喜のような立場にある者が、長州藩に期待を抱かせるような手紙を、こんな時期に書いたとすれば実に興味深い。それは慶喜本人でさえ、「当時の形勢より考うるも、あるべきことにあらず」と述べているほどだ。

昔夢会における慶喜の回答を信じるのなら、『防長回天史』は出鱈目な史料を掲載したことになる。しかし本書はその後に出た修訂版からも、慶喜の返書は外していない。第五冊の三〇九から三一〇頁にかけて、全文が掲載されているのだ。

結論だけ言えばこの場合、私は『防長回天史』の方を信じる。慶喜は自分の伝記の中に、長州藩主との手紙の往復を史実として残したくなかったのだろう。あまりに軽率な行為だったと反省したのかもしれない。だから突き付けられた『防長回天史』に出ている自身の手紙を、拒否したのだろう。

『徳川慶喜公伝』は、幕府という敗者側の歴史である。しかし敗者の歴史だからと言って、すべてが真実だとは限らない。敗者もまた人である。特に慶喜は、十五代徳川将軍という絶大な権力を一度は握った、プライドの高い男だ。それゆえに、残したくない史実も当然ある。だからこそ、「敵方」の『防長回天史』を合わせ鏡にして読む必要があると私は思う。とくに東軍関係の読者に、という今回のマツノ書店の狙いも、ここにあると言えよう。

『防長回天史』再復刻を祝って

幕末、長州が会津に怨念を持ってもおかしくなかった事情

会津史談会顧問　畑　敬之助

平成三年（一九九一）にマツノ書店から『防長回天史』（以下では本書）が復刻されると、私はすぐに全十三巻を購入した。そのわけは、すでに昭和四十七年（一九六七）以来、山口県萩市側から友好関係の申し出があるにもかかわらず、そのつど因循姑息に終始し、その因を暗に一部市民の怨念に帰する市当局の態度に割りきれないものを感じてきたし、さらにこの怨念論は、幕末、会津長州間に存在した固有の関係を戊辰戦争だけに限局し矮小化する一方的議論にみえたからだ。長州側の情報を求めたいと思っていた。

私は昭和六年（一九三一）創立の「会津史談会」の会員。実は本書復刻当時、戊辰戦争で会津が長州からやられた！という見方にいささかうんざりしていた。たまたま本書復刻の四年後、当時新進気鋭の大阪経済大学の家近良樹助教授（現在は教授）が吉川弘文館から『幕末政治と討幕』なる画期的労作を発刊され、会津が幕末五年間、京都で一会桑（一橋・会津・桑名）勢力を形成してその軍事的中心となり、孝明天皇の寵愛をバックに、今度は攻守ところを変えて長州をいじめた時期があることを知った。会長間の私戦とまで言われたこの関係は足かけ五年。しかし通観すれば、明治維新招来の一大支流となったといってよい。

会津と長州五年間の対立抗争は軍事と政治両面にわたった。またまた慶応三年（一八六七）から翌年に至る最後の一年余は、会津側の形勢日に日に凋落し、慶応三年十月、十二月は政治的に、翌年は正月早々の鳥羽伏見戦以来軍事的に、会津側はいわゆる一方的に「やっつけられる」側にまわり、終には九月、城下の盟をさせられたのだった。会津側が今日怨念と称して友好関係を拒絶する理由は、この間に受けた戦闘行為以外での被害事実と、朝敵呼ばわりされて名誉感情を著しく毀損されたその後の経緯に基因するものである。

ところで問題は、この一年余に先立つ四年間はどうだったのかにある。前掲・家近著の条理に本書第三、四編を重ねて読むと、他書にない風景が見えてきたではないか。

実はこの期間は逆に、長州藩が会津藩にいじめられ、やっつけられた期間だったのだ。

さて会津と長州の間には、文久三年（一八六三）から慶応二年（一八六六）まで四年余の間に、少なくとも四つの戦いがあった。列挙すれば、文久政変（堺町門の変）、蛤御門の変（禁門の変）、第一次征長戦争、第二次征長戦争（四境戦争）である。

ここで私が最も重視するのは、ただ一回、長州側が先手をとって攻め込んだ「蛤御門の変」と、その原因だ。なぜ長州軍は元治元年（一八六四）七月十九日早朝、京都で三方から御所目掛けて、会津藩だけを不倶戴天の敵として攻め込んだのか、ということである。

実はこの原因の中に、この期間連鎖的に起こった四つの戦い、そして最終的に回天の業の着手につながる、長州藩の名分と戦略が秘められているからだ。

どういうことであるのか。事は文久三年八月十八日早朝、「昧爽堺町門警備の長藩士飯田竹次郎らまさに入衛せんとす。薩兵これを拒み大声叱して曰く、勅詔ありと銃を以てこれに擬す。」（本書第三編第四十三章）に始まった。長州藩の堺町門警備が免じられたのだ。この突然の衝撃に京都の長州藩邸はどんでん返し。早速兵を御所内堺町門側の長州派公卿・鷹司関白邸に送り、そこに立てこもらせて抗戦姿勢をとった。これが文久政変である。

幸い流血に至らず、長州軍は洛内大仏に退去し、憤懣の中、七卿を奉じて都落ちし、帰国するや反転して陳情・歎願に移った。だがそれも入京すら許されず、歎願書が天聴に達した形跡もなく、剰え（あまつさえ）「入京拒絶の説を執りたるは会藩なり」（前掲書）の絶望的情報で焦りは加熱、翌年六月五日の池田屋騒動を呼び、今度はそれが起爆剤になって藩士・浪士らが上京、七月十九日早朝の「禁門の変」となった。

ところでこの二つの変自体のことはどの本にも明記されているが、問題はこの間の歎願運動の経過。これは戦闘ではない、平和的交渉だ。だから殺傷の痛みはない。反面、精神的苦痛は酷い。名誉を失った無念から、歎願不通の失望・焦りそして煩悶へ、やがて絶望へと、そのトータルはまさに切歯扼腕・臥薪嘗胆。ところが本書以外にほとんど記述がない。

この長州藩の苦悩こそ、『防長回天史』第三編・第四編の叙述から推測できる心理風景である。これだけ具体かつ詳細な記録は他書にはない。会津の人々が以て読むべく考えるべく、おのが怨念という名の心事の根拠と比較すべき貴重な資料であろう。

こういうわけで私は、大枚をはたいて『防長回天史』を購入した当初の目的を果たしたのである。

本書を通読して余得も多かった。特に第一巻の「総緒言」「再版緒言」と、北大名誉教授・田中彰氏による巻末の「解説」計三十六頁がそれ。

著者の執筆着手事情とその後の経過、編集方針、編集同人、毛利家及び地元史家との込み入った関係、さらに背景となる発行事情等々、いずれも、本書の内容をより一般化して多彩な部分に光を当てながら、事実を中心として、いかに戊辰史全体を客観的に描写するかの工夫であることを知った。

なお最近私は、ベストセラーの姜尚中著『悩む力』を読む機会を得た。その《帯（おび）》にたまたま、「悩んで、悩んで、突き抜けた！」の言葉を見つけ、それが、何か幕末会津藩にいじめられ悩んだ中からエネルギーを培った長州藩の姿に重なる思いがした。彼らはそのエネルギーをまず敗れはしたものの蛤御門の変で試み、次いで藩内改革にぶっつけて活路を開き、最後に明治維新に突き抜けさせたからである。

私は今、戊辰史で会津・長州関係を学ぶ時、総合的にはこの『防長回天史』を、戦史関係では大山柏著『戊辰役戦史 上下』に頼ることが多い。共に薩長関係者の著作だが、良いものに国境はない。会津にも会津人が書いた『七年史』『京都守護職始末』『会津戊辰戦史』などマツノ書店復刻の五名著がある。

『防長回天史』の意義

北海道大学名誉教授　田中　彰

■「他藩人」対「旧臣連」

「毛利家ニ於テハ今ヤ既ニ編輯所ヲ閉ツ。然レトモ本書ハ予カ多年ノ辛苦ニ成レルモノナルノミナラス、後年一世ヲ稗益スルノ時期到来スヘキヲ信スルカ故ニ、更ニ之ヲ整理潤飾シ、事ノ極メテ細微ナルモノ及ヒ大勢叙述中二州ノ歴史ト密接ノ関係ナク、必ラスシモ必要ナラサル事項ハ多ク之ヲ削リ、毛利家ノ認容ヲ得、順次若干部ヲ印刷シテ以テ他日ヲ待ツ。」（「総緒言」）

明治四十四年（一九一一）七月、『防長回天史』（初版）第一編の上梓に当たって末松謙澄はこう記している。「未定稿」を経ていたとはいえ、ここには謙澄の自負と自信が溢れている。にもかかわらず『防長回天史』はその完成・刊行をまたないうちに、なぜ毛利家は編輯所を閉じ、謙澄の依嘱を解いたのか。

ひとつはすでにふれたように『防長回天史』編纂に対する外部からの批判である。

（中略）

これら外部からの批判も毛利家における『防長回天史』編纂中止の一因ではあろう。しかし、謙澄が「他藩人」であったことは当初から自明のことであったし、『社会新報』の『防長回天史』刊行に対する満を持しての批判宣言があったからといって、毛利家が編纂を中止するはずがない。

とすれば、編纂中止にはもっと切実な内部事情があったとみるべきだろう。

すでに編纂過程で、当初は表面化しなかった末松謙澄と中原邦平の対抗が「他藩人」対「旧臣連」の暗闘として徐々に浮び上ってくる。

それは『防長回天史』の編纂意図と直接からむ。大正九年（一九二〇）九月に書かれた「再版緒言」には次のように断言している。

「本書防長ノ二字ヲ冠スト雖モ、維新ノ事業ニハ防長二州ノ関係其半ニ居ルノミナラズ、本書ハ当時ノ大勢及ビ諸藩ノ関係ヲモ其要ヲ併叙セルヲ以テ、実ハ維新全史ト異ナラズ、読者ノ幸ニ此見地ヨリ観察センコトヲ切望ス。」

彼のめざしていたものは、たとえ防長の二字が冠してあってもあくまで「維新全史」だったのである。

この謙澄の意図したところと毛利家（およびその周辺）のめざすところの微妙なくいちがいが、謙澄対中原との関係として現われてくるのである。

中原は毛利家の歴史に通じたベテランであった。それだけに彼の描こうとする明治維新の歴史はあくまで毛利家中心のそれでなければならなかった。さらにいえば毛利氏という藩主中心の歴史でなければならなかったのである。その中原の企図をはっきり示すものが、明治四十二年（一九〇九）に講話速記として印刷・頒布され、翌々四十四年五月に増訂して刊行された『訂正補修忠正公勤王事蹟』（マツノ書店復刻）にほかならなかった。この増訂版刊行は、『防長回天史』初版本第一編の刊行される三か月前のことである。（この明治四十四年六月三十日限りで『防長回天史』の編纂が打切りになっていることを想起せよ）

それは末松謙澄と中原邦平との史観ないしは歴史への視座の相違といってもよいが、「末松の背後に伊藤博文がおり、中原の背後に井上馨がいた」ということになると話は別になる。ましてや、「井上の伊藤に対する嫌悪は深く、この伊藤対井上の対立が、末松対中原という形で表面化した。防長回天史未定稿の記述で、井上より伊藤の活動の方が高く評価されているため、『開くもけがらわしい』として黙殺したのは井上馨一派と、解雇された元編輯所総裁宍戸〇一派であった」（引用は前掲広田論文（其の二））とすれば、事態は深刻そのものである。

『防長回天史』が客観性を標榜し、「公平」をうたっていればいるほどこのような伊藤・井上の評価のからむ『防長回天史』の刊行は事態をぬきさしならぬものとしていくではないか。このまま『防長回天史』が毛利家によって印刷に付され、公刊されれば、毛利家にとってはとりかえしのつかない由々しい問題となることは火を見るよりも明らかだった。

だからこそ、毛利家は長年多くの費用をかけ、いまや完成真近な『防長回天史』の編纂を、毛利家としては打切らざるをえなかったのである。謙澄はその依嘱を解かれた。

■『防長回天史』の完成

かくして、毛利家から離れた謙澄は、「著作兼発行者」を「子爵末松謙澄」とし、東京国文社を印刷所と、また、「非売品」として『防長回天史』の初版本を刊行したのである。その刊行の日付は以下のようになっている。（以下中略）

田村邸にて本書「総合索引」の打ち合わせ。
左・田中彰氏、右・田村哲夫氏

謙澄は「再版緒言」でいう。

「予カ毛利公爵家ノ依嘱ニ依リ本書ノ編纂ニ着手セシハ、二十有余年前ノ明治三十一年ニ在リ、其後若干年ニシテ故アリ、其事中止トナレリ。」（傍点引用者）

彼は毛利家における編纂中止の理由を「故アリ」の一語に託する。編纂中止の理由を謙澄は、この一語のなかに封じ込めたのである。だから彼は、「本書ノ内容ニ関シテハ何等ノ事項ヲ問ハス予独リ其責ニ任ス。毛利家ノ与リ知ル所ニアラサルナリ」（「防長回天史総緒言」）と言った。毛利家に累の及ぶことを避けようとする謙澄の配慮が伝わってくる。

謙澄はこの初版本完結後、その試刷（三十部）に必要な修訂を加え、大正九年九月中旬にそれを完了し、再版に付そうとした。

更に「再版緒言」で彼はいう。

「既ニシテ予ハ公爵家（毛利家―引用者注、以下同）ノ容認ヲ得テ、全然自費自力ヲ以テ其業ヲ継続スルコト無慮十年、其間事故ノ為メ僑々間断アリシ外ハ殆ンド一切ノ政治上社交上ノ功名モ義務モ之ヲ拋チ、日トナク夜トナク、心若クハ手ヲ此事ニ労セザルノ時殆ンド之レナク、本年（大正九年）六月末日ヲ以テ全部十二巻ヲ完結シ、九月中旬ニ至リ修訂ノ功ヲモ竣リタルモナリ。」

彼がいかに全心全霊を込めて『防長回天史』に打ち込んでいたかは、この一文でわかる。

しかし、修訂の筆を欄いたその翌月の十月二日、対壊講和条約調査委員として枢密院に出席中、にわかに気分が悪くなって、

東京市芝区西久保城山町四番地（それは初版本発行者の住所でもある）の自宅に帰り、流行性感冒に急性肋膜炎を併発して、五日、彼はこの世の人でなくなった。数え年六十六歳。『防長回天史』全十二巻の修訂再版本の原稿完成と引換えに末松謙澄は冥界に旅立ったのである。

修訂再版本は、著作者を「子爵末松謙澄」とし、嗣子末松春彦が発行者となり、同じ東京国文社で大正十年（一九二一）二月二十五日に印刷に付され、三月一日、全十二巻が一挙に公刊された。

世に流布しているのは、すべてこの修訂再版本である。

■『防長回天史』の意義

最後に本書の意義について要約的に述べておこう。

第一は、すでに謙澄自身もいっているように、『防長回天史』は「防長」の二文字は冠しているものの、この著は「維新全史」であったことである。長州藩を窓とし、明治維新史として、本書はいまなお生彩を放っている。これは本書の総合性ともからむ。『防長回天史』はたんなる明治維新政治史ではない。政治に多くのページをさいているが、財政や外交、軍事や産業、教育あるいは文化・思想などにも叙述の筆を及ぼし、トータルに歴史をとらえようとしている。

末松謙澄のいう「全史」という語の背後には、一長州藩という地域性をこえることはもとより、右のような幅広い意味が含まれているように思われる。

第二は、その叙述の客観性についてである。それはこれまで詳しくみてきたように、「他藩人」である謙澄がこの『防長回天史』編纂を引受けたところにすでに発している。いや、それは「他藩人」だからこそといい替えなければならないかもしれない。

「記録者たち―末松謙澄と『防長回天史』」というタイトルで、四十六回にわたって連載を続けた「西日本新聞」（一九七九年一月二十一日―八十年二月二十九日。これは金子厚男『末松謙澄と防長回天史』としてまとめられて刊行）は、「〝敵国人〟と非難されたことに伴う感情が、冷徹な史家であるべく抑制の錘となって絶えず彼のうちにあり『防長回天史』の客観性を保つに作用したであろう、と想像するのである」と述べた。それはすでに謙澄が渡英して、明治十二年、ゼルフィーに近代歴史学の方法を問うたところにその根源はあったといってよい。

謙澄自身も「材料ノ募集ハ最モ公明正大ヲ尽シタリ」と「総緒言」で断言し、毛利家も「予及ヒ予ノ助手ノ多数カ防長人士ニ非ラサルニ関セス、全然文庫ヲ開放シテ秘書秘文ト雖トモ其閲覧ヲ自由ニシタリ、故ニ予ハ本書ノ記事ノ最モ正確ナルコトヲ自ラ断言シテ毫モ悼ル所ナキナリ」と明記してやまなかったのである。

謙澄は歴史叙述に関するみずからの志をこの『防長回天史』で貫いたと自負していたといってよい。

それは、第三の史料主義的叙述と関わる。「総緒言」で謙澄はいう。

「本書ハ評論的歴史ヨリモ寧ロ記録的歴史ノ性質ヲ以テ著述セリ、故ニ批評論断ハ力メテ之ヲ避ケ、事実ヲ排列スルヲ要旨トセリ、行文中多クノ原文書ヲ挿入シ、通読ノ際往々煩ニ過クルノ嫌ナキニアラサルモノ之レカ為メナリ。」

すでに述べたように「未定稿」に較べると『防長回天史』は大幅に史料を削除している。それは別の言葉でいえば、削除した多くの史料を地の文章の背後に秘めて叙述していることになる。彼が「煩ニ過クルノ嫌」を最小限にするための努力を「未定稿」から『防長回天史』への成稿過程で払っていることは明らかであろう。

その精選され、引用された史料のあるものは現在原典の失われたものも多々ある。本書がいまだ使用にたえる維新史料集として貴重とされるゆえんでもある。

謙澄は明治二十～三十年代の「評論的歴史」を知らなかったわけではない。知っていてあえて「記録的歴史」というアカデミズムの歴史手法に比重をおいたといってよい。ここにもゼルフィーの影をみるのは私のみであろうか。

第四に、その文体をあげなければなるまい。謙澄には『日本文章論一（明治十九年）という著書（『明治文学全集79 明治芸術・文学論集』筑摩書房、一九七五年、所収）があり、彼はそこで言文一致を主張した。それは「成るべく多数の人民に了解し易からしめる」ためであった。『防長回天史』の叙述は、現在では読むのが必ずしも容易ではない。しかし、その文体は簡にして要をえ、かつリズミカルな張りのある文章といってよい。文学者謙澄の面目躍如たる名文を随所に見出すことはけっして難しくはないのである。「後年一代ヲ稗益スルノ時期到来スヘキヲ信スル」（「総緒言」）というところには、内容・文体ともども本書に賭けた謙澄の心情と確信であったにちがいない。

■その限界を超えて

その点からいえば、維新史料編纂会がその設置に当たって、史料蒐集の「公平」をうたったのと同じように、謙澄の『防長回天史』の「再版緒言」での「公平無私ト忠実正確」もまた、所詮客観的には藩閥史観の枠、ないしはその「傍系」以上のものではなかったといえるかもしれない。それは藩閥の巨頭伊藤の女婿としての謙澄の宿命であったかもしれないし、その意味では伊藤の遺産だったということができるかもしれない。

もとより、謙澄はみずからの宿命を自覚しつつ、いや自覚していたがゆえに、最大限に「他藩人」としての立場から、藩閥の一方の雄長州藩の役割を明治維新のなかで「公平」に位置づけようとした。

それが同時に、この『防長回天史』を毛利家と断ち切らざるをえない運命にさせたこともすでにみた通りである。

『防長回天史』は、謙澄が著者であることを通して数奇な道を辿りつつ、伊藤の女婿、かつ閣僚体験をもつ近代天皇制の一員としての謙澄の最後の著作となった。

このことを念頭におけば、『防長回天史』の史料選択には限界もあるし、また、その客観性、総合性といっても、近代天皇制の枠組の範囲という点で一定の限界があったことは否定できない。

本書はまた「誤植の名著」ともいわれる。修訂再版（本書のこの復刻版）に付された「正誤表」を一見するだけでそれはわかる。

しかし、そうした限界をこえて、なおかつこの『防長回天史』は、現代の明治維新史研究には不可欠の文献としてわれわれの座右におく価値がある。

本書がみなと新聞社版（一九六七年刊）再度の柏書房版（一九八〇年刊）そして今回のマツノ書店の完全復刻版として世に問われるゆえんもここにあるといわなければならない。

本書マツノ書店復刻版第一巻「解説」の一部を要約の上、小見出しを付けたものです。この「解説」は本文に負けず劣らずよく書けており、全文をご紹介したいのですが、三十四頁もあります。ぜひ本書でお読み下さい。

あえて再復刻する理由

これまで三度にわたって復刻された本書は、いずれも縮刷版で、文字が小さすぎ読みにくいため敬遠されていました。小社では平成三年、初めて原寸大で復刻、五七〇頁に及ぶ新作の「総合索引」を付して大好評を博し、限定六百部を販売。以来これが「決定版」となっています。

平成十六年と十八年、恒例の「復刻希望アンケート」に本書を載せたところ、【持っている】は二回ともダントツ第一位、【買いたい】は同じく第三位でした。

【持っている】が圧倒的に多いのに【買いたい】も結構多い本は初めてで需要の大きさをはっきり示しています。

「投票者への義理」「アンケートへの信用」からも早く復刻しなければ！ここ数年の大きな宿題でした。

でも全国の主要古書店が販売しているネット「日本の古本屋」を見ると、『防長回天史』は全巻揃いだけでも常時二十点以上、端本等を含めればその倍以上が市場にダブついており、復刻する余地は皆無に見えます。

しかし、なお長い目で眺めていると、中でも（他社が販売している）小社の「決定版」は、十～十五万円もするせいか、あまり動かないようですが、それでも汚れなどのため特に廉価なものは動いているようで……。つまり「思い切った超廉価で復刻すれば、必ず一定の需要はある！」これが私の結論でした。

その上、小社の復刻はすでに十八年も昔のこと、そして当時お客様の大半は山口県内。県外は未開拓とも言えます。

以上、活字出版絶不況の時代に逆行して、大型史料本の再復刻に挑戦するゆえんです。

■題名のこと　これまでの版はすべて『修訂防長回天史』でしたが、今回は表紙の題字から「修訂」を省き『防長回天史』とします。本書「初版」は百年前わずか三十部の刊行でもあり、その後同名の本は皆無なので、混乱は起きないと思うからです。

■お早めに！　わずか三百部の「貧者の一灯」ですみません。今回は部数変更を絶対しない約束で、すでに五月から印刷に入っております。どうぞ早めにご予約下さい！

『防長回天史』は身近に置いて酷使せよ！　奈良本辰也

▼十八年前、本書の復刻に際し、京都のご自宅へ奈良本辰也先生を訪ねました。そのとき中庭に面した書斎で見せて頂いた『防長回天史』は、こんな本は見たことがないほど見事に使いこなされていました。第一頁に書いておられる通りほとんど形が崩れ、綴じ糸は切れ、ばらばらになっていたのが強く印象に残っています。

▼したがってこのたびは並製ながら、特に製本には留意しております。実験の結果、たとえば本の背中をへの字に曲げても、背中の形こそ崩れますが、綴じ糸は切れず、むしろ開けやすくなるばかり。この点は大村印刷の製本部も自信を持っております。

▼もし奈良本先生が生きておられたら、真っ先に進呈したいのに……残念です。

■体　裁　七千六百頁　A5判並製・箱無
■特　価　五万円（税・〒込）
■特価締切　本年六月三〇日
または先着三百名様限り
■発　売　平成二十一年九月上旬
限定三百部（番号入）
▼書店不卸　▼分割払可　▼返本OK

山口県周南市銀座2～13
℡ 0834～21～2195
マツノ書店

防長 大事日誌

三月〇日　秋山兄弟のことでご当地松山を視察。マスコミも含めた地元の関心度は、坊ちゃんや正岡子規に比べ、まだはるかに低い。

三月×日　今回の三点は、大きな中だるみのあと締切間際、一気に持ち返し、初めての分野なのに、ご当地をあてにせず、通常のPRだけで何とか安全圏内とは嬉しい。

四月〇日　「これで安心」と思っていたところに思わぬ伏兵あり。

まず『秋山好古』は、箱の張紙が裏（内側）へ回った上下の隅に斜めの隙間を見つけ、箱ごと作り替え、遅れたという。

『慶応戊辰奥羽蝦夷戦乱史』のときは他社で同じミス。表だった苦情でもなくお客様のお許しを得たが、今回の三点を発注した印刷所は五十年以上のおつきあい。

他社と違い、これまでこんな仕上げはしてこなかった上、更に改めて念を押しておいたのに……。

四月×日　『秋山真之』は原本の表紙デザインが秀逸なので、それを踏襲したのは良いが、シルクスクリーンの乾きが悪く失敗。とうとう二週間も遅れた。

今どき「箱入娘」を造るのは大変なのだ。

四月〇日　『山縣公のおもかげ』だけ早く完成し、予約者へ発送。

ところが翌日、二名のお方から「五行印刷ミス」のお知らせあり。

これで三点共倒れ！

五月×日　印刷所は即座に「全部作り替える」と言ってくれたが、エコの時代に逆行する上、時間的にもこれ以上は待てず。お客様にはその箇所の刷りかえ一枚と「お詫び」で済ませて頂く。

まだ送っていなかった三点セットの皆様へも同様。暗黙のご了承は得たが、何とも申し訳ない。

五月〇日　三点とも内容は抜群、NHK大型ドラマ化やロングテール現象の追い風も吹く。各百冊くらいの予備はいつか売れると、どこへも一切PRせず気分良し。

五月×日　上京。大山巌の曾孫・歴史家の大山格氏と会談。「剛毅木訥」を絵に描いたようなお方。

『元帥公爵大山巌』は「本編・年譜・付図」と全三巻もあるせいか、内容抜群なのにこの七十五年間、一度も復刻されていない。

ぜひ、早く出したい。

夜は、長南政義氏と初めて一献。

昨秋以来『元帥公爵大山巌』ほか多くの稀書善本を紹介、提供して頂き『防長回天史』は「六万円でなく五万円」と強く推したお客様であり、戦史研究家なのだ。

よくよく聞くと、まだ二十代とは、これまた驚き桃の木……。

それにしても、多くの超有能な〈軍師〉に導かれ、支えられ、あたかも幕末毛利の殿様「そうせい侯」になった気分である。

五月〇日　大久保利通の命日にちなみ、毎年青山霊園で行われている「甲東祭」へ出席。今年も全国各地から四十名近く集まる。

いま日本に待たれているのは、この明晰な頭脳と豪腕の首相だ。

折悪しく忌野とかいうロックシンガーの葬儀と重なり、ヘリコプターが上空を舞い、腹が立つ。

五月×日　先日長南氏に「マツノは、限定三百部なのに、なぜこんなに安い？」と聞かれ、即答できなかった。そういえば今や、一頁あたり70円の復刻本もある。

そのわけは、以前から出版界の常識を逆手に取り、①良い本を少し作って速く売る。②ミニ産直に返品なし。③宣伝はパンフとハガキだけ。④人件費（生活費）の節減などを心掛けてきたからか。

もちろん、すべては最高のお客様あってのこと。

五月〇日　『防長回天史』に限定番号を入れることに。

産地偽装から郵便割引の悪用まで、企業倫理の失墜が日常茶飯事となった昨今、普及版とはいえ五万円もする本。番号記入は当然の義理であり、武装でもある。

五月×日　藤原相之助著『奥羽戊辰戦争と仙台藩』の復刻を版元の柏書房に打診したところ、打てば響く、即OKの返事に感謝感激。

五月〇日　十八年前は九万円の『防長回天史』が六百部、僅か八頁のパンフで売れたのに、今回は五万円、三百部に二十八頁も……。

この数字が活字業界の現状を雄弁に物語っているといえようか。

五月×日　早く予約を取って安心したいとばかりパンフを急いで作っているが、八月末、本書完成と同時に発送しても同じことなのに。

六月〇日　五月末に発送したハガキPRを見ての電話予約多し。これは異常だ。

とにかく賽は投げられた。「早い者勝ち」としか言いようがない。

21/6/3　Q生